

# 実験文字学の構想

池田 潤<sup>†</sup>

**【要旨】**音声言語と文字言語が本質的に異なる研究対象だと考える立場に立つと、20世紀の言語学は音声言語と文字言語のねじれた半面を重点的に研究してきたことになる。ねじれを是正するには、音声言語研究と文字研究を本格的に確立する必要があり、これこそが本学会が挑むべき課題のひとつだと筆者は考える。この考え方を踏まえ、本稿では実験文字学を構想し、研究の事例を紹介する。

**キーワード**：音声言語、文字言語、音法論、視覚文字学、ERP

## 1. はじめに

筆者は別稿(池田 2006)において、音声言語と文字言語は統語的、語用論的、語彙的に異なる別の言語ないし言語変種であり、それぞれ別個に記述すべき対象であると述べた。また、音声言語優先を標榜する現代言語学が実際には文字言語偏重主義に満ちているという Linell (2005) の主張を紹介した。そのうえで、次のような指摘をおこなった。

20世紀の言語学は音声言語と文字言語を混同したまま展開したため、音声言語の素材に関する研究が飛躍的に進展した半面、文や句という文字言語の単位に立脚した文法研究が音声言語研究と称して行われる結果となったのである。21世紀の言語学に求められるのは、この混同から脱却し、両者を別個の研究対象として確立することである。(池田 2006: 329)

これを図示すると、次のようになる。すなわち、音声や文字によって同一の言語が表示される(図 A)のではなく、音声が表示する言語と文字が表示する言語は統語的、語用論的、語彙的に異なる別の言語であり、前者を音声言語、後者を文字言語と呼び分ける必要がある(図 B)というのが筆者の主張である。

---

<sup>†</sup>筑波大学大学院人文社会科学部研究科



図 A



図 B

図 B で網掛けを施した部分が、上述の「音声言語の素材に関する研究」と「文や句という文字言語の単位に立脚した文法研究」という 20 世紀の言語学が力を傾注してきた研究領域である。図 A のように音声言語と文字言語を同一の「言語」とみなすなら、20 世紀の言語学は「言語」とその最も重要な表現実質である「音声」を研究してきたことになる。ところが、図 B のように音声言語と文字言語が本質的に異なる研究対象だと考える立場に立つと、20 世紀の言語学は音声言語と文字言語のねじれた半面を重点的に研究してきたということになる。筆者は図 B の立場に立ち、このねじれを是正することこそが 21 世紀の言語学のひとつの大きな課題だと考えるのである。

ねじれを是正するには、網掛けを施した部分の研究を従来通り着実に続けつつ、網掛けのない部分、すなわち音声言語研究と文字研究を本格的に確立する必要がある。このうち音声言語研究の必要性をいち早く指摘したのが、本学会会長の城生 佰太郎氏である。城生氏は 1985 年の著作の中で従来の「文法」が事実上「文字言語の法」であったと指摘し、文法論に対置された「音声言語の法」としての「音法論」の必要性を唱えている。文や句といった文字言語の単位にとらわれずに音声言語を研究するためには、まず音声言語の単位を確立する必要がある<sup>1</sup>。実験という手法を用いて音声言語の単位を確立することが、本学会の挑むべき課題のひとつだと筆者は考える。

本学会が取り組むべきもうひとつの重要課題が文字研究である。別稿でも指摘したように、「文字は音声と並ぶ言語記号表現であるが、20 世紀の言語学を貫くひとつの理念として音声言語中心主義が存在したため、ソーシャルやブルームフィールドを初めとする多くの言語学者が文字という記号表現にほとんど関心を向けてこなかった」(池田 2008: 2)。音声に関しては、「言語音の産出にかかわる生理音声学 (physiological phonetics)、口唇より放出された後の段階を扱う音響音声学 (acoustic phonetics)、聴覚器官で受容された後、大脳における聴覚情報処理系の営みによって言語音が認知理解されるまでの段階を扱う聴覚音声学 (auditory phonetics)」(城生 2006: 55) という 3 つの分野が確立されているが、文字についても同様の研究分野を確立していく必要がある。

このうち、に対応する分野は筆記された後の段階を扱う研究分野となる。筆記されたものを「文献」と総称するならば、この研究分野は文献学 (philology) に含まれることになる。文献学は数千年の伝統をもつ学問であり、文字資料に

<sup>1</sup> 城生 (1985) は、音声言語の単位として呼気段落、頂点段落、意義段落等を提示している。

基づいて過去の歴史や文化の全体像を描き出すことを目的とする。この目的のために、文献学は文献をあらゆる角度から精査する。その作業の基盤は、言うまでもなく文字の精査である。文献学における文字の精査とは、未解読の文献を対象とする場合、(a)無限に異なる字形の中から弁別的な単位を抽出することであり、解読済みの文字で書かれた文献を対象とするなら、(b)弁別的な単位を同定して個々の文書を解読することであり、また(c)弁別的ではないエティックな字形の異なり（異字体など）の調査分類に基づき古文書の年代や書き手を推定することである。(a)は文字の解読、(b)は文書の解読、(c)はしばしば古文書学（paleography）ないし碑銘学（epigraphy）と呼ばれるが<sup>2</sup>、(a)(b)(c)を合わせた研究分野を指す名称は存在しない。そこで、筆者は別稿（池田 2006: 331）でこれを文献文字学と呼ぶことを提案した。したがって、文献文字学は新しい研究分野ではなく、いわば古くから文献学の一部として研究されてきた(a)(b)(c)の総称であると言える。そのため、文献文字学は基本的には実験研究ではない<sup>3</sup>。

とに対応する分野としては、失読・失書の臨床研究を基盤とする「神経文字学」が存在する<sup>4</sup>。したがって、文字の実験研究と言えば、この分野を指すことになる。神経文字学については、主に医学の分野で失読・失書の臨床研究にもとづく研究の蓄積があるが、言語学における研究は皆無に近い。したがって、言語学の立場から文字の実験研究を行う意義は大きく、これが本学会に課された使命のひとつだと筆者は考える。

言語学の立場から文字の実験研究に取り組む場合、少なくともその初期段階においては、文字の産出と認知に同じ重きを置いて研究することにはならない。記号の産出（話す）と認知（聞く）がほぼ同時におこなわれ、日常的な伝達においては記号が保存されない音声と異なり、文字の場合、一般に記号の産出（書く）を度外視しても文字の研究は可能であり、実際に文献は文字の産出プロセスを度外視して認知（読む）されることが多い。それは、文献研究者が文字の産出過程に無関心だからではない。文字の産出過程が分かると文献に関する理解が格段に深まるため、当然のことながら文献研究者は文字の産出過程に多大な関心をもっている。しかし、古代の文献の場合、文字の産出過程はもはや知り得ないし、現代の文献であっても文字の産出と認知には通常時間差があり、産出が個人の営為であるため、研究者が文字の産出プロセスを知りうるケースはまれである。そのため、通常は書く過程を度外視して、文献として書かれた結果だけを読むのである。したがって、文字の実験研究においても書くプロセスより読むプロセスに比重が置かれてもおかしくはないのだが、神経文字学は「読み書き」の実験研究であり、「書き」と「読み」それぞれに特化した研究分野の名称は存在しない。そこで、筆者は別稿（池田 2006: 331）で文字の産出にかかわる分野を筆記文字学、視覚器官で受容された後、大脳における視覚情報

<sup>2</sup> これらの用語は分野や関心によって定義が異なるため、明確な線引きが難しい。詳しくは、ナヴェー（2000: 7-8）参照。

<sup>3</sup> ただし、最近では粘土板の記載岩石学的分析・化学的分析や羊皮紙等のDNA鑑定によって文書の出自を探る研究なども現れ、文献文字学に実験的手法を採り入れる試みも始まっている。

<sup>4</sup> 詳しくは、岩田・河村（2007）を参照。

処理系の営みによって文字が認知理解されるまでの段階を扱う分野を視覚文字学と呼び分けることを提案したのである<sup>5</sup>。

これを踏まえると、文字の実験研究にとって直近の課題は視覚文字学の確立であると言える。その第一歩として、筆者は文字類型の視覚文字学的研究に取り組んでいる。一例を挙げると、典型的に異なる視覚刺激によって誘発されるERPの基本的な特徴を虚心坦懐に探るべく、被験者を1名に限定して基礎実験を実施した。具体的には、灰色の背景に白の「■」をコンピュータの画面に映して被験者に見せ、施行内容に応じて次のような指示を与えた<sup>6</sup>。

施行 I: ディスプレイに現れる図形を頭の中で繰り返してください。

施行 II: ディスプレイに現れる文字をカタカナの「口」として口に出さずに読んでください。

施行 III: ディスプレイに現れる文字を漢字の「口」として口に出さずに読んでください。

本実験の結果、同一の視覚刺激であっても、それをどう認知するかによって異なる振り分けを脳が視覚刺激処理の早い段階でおこなっている可能性が示唆された。これを主発点として、視覚刺激が誘発するERPの基礎研究を今後も続け、本学会を舞台に視覚文字学の確立を目指したいと思う。

#### 【参考文献】

- 池田潤 (2006) 「文献言語学序説」城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会(編)『実験音声学と一般言語学』東京堂出版, 325-334.
- 池田潤(2008)「視覚刺激によるERPの基礎研究:文字類型の実証的研究(1)」『文藝言語研究』言語篇 54, 1-13.
- 岩田誠・河村満 (編) (2007) 『神経文字学:読み書きの神経科学』医学書院.
- 城生佰太郎 (1985) 「音用論のすすめ」林四郎(編)『日本語の教育』応用言語学講座 1, 19-32. 明治書院.
- 城生佰太郎 (2006) 「実験音声学の研究手法」城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会(編)『実験音声学と一般言語学』東京堂出版, 52-60.
- Linell, P. (2005) *The written language bias in linguistics: Its nature, origins and transformations*. London: Routledge.
- ナヴェー, J. (2000) 『初期アルファベットの歴史』法政大学出版局.

<sup>5</sup> 点字に対しては触覚文字学という研究分野をたてることができる。

<sup>6</sup> 実験の詳細については、池田(2008)参照。

# An Overture for Experimental Graphetics

Jun IKEDA<sup>†</sup>

If we assume that a spoken language and its written counterpart are essentially distinct entities, it turns out that the twentieth century linguistics has studied mismatching aspects of them (sounds and written language) and has paid little attention to the remaining aspects (writing and spoken language). In order to solve this incompatible situation, we need to establish the science of writing (graphetics) and that of spoken language. Based on this spirit, this paper argues that the Japan Experimental Linguistics Society should play an active role in establishing experimental graphetics and refer to Ikeda (2008) as an instance of such endeavor.

<sup>†</sup> *Graduate School of Humanities and Social Sciences*  
*University of Tsukuba*  
*1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan*  
*E-mail: ji@lingua.tsukuba.ac.jp*